

序 説

画像診断を学ぶための教科書・雑誌は山ほどあるのに、画像診断レポートの書き方自体を学ぶための教材は、ほとんど存在しない。学会・研究会で珍しい病態や教訓的なピットフォールを学ぶことはできるが、レポートの全文をみる機会はない。エキスパートの先生方がどんなレポートを書いているかは、(特に異常がない部分に対してはなおさら) たまたま同じ職場にいない限り、知ることができない。私たち画像診断医の仕事の大半はレポート作成であるのに、よいレポートを書くためのエッセンスは散らばっている。かき集めても、どこか物足りない。どうにかならないか。

本号は、その“空白”を埋めることを目的とした、類書のない『臨床画像増刊号』である。

レポートの書き方には個性が出る。本増刊号の執筆を担当して下さったエキスパートの先生方にも各々の流派があり、使われている言葉もさまざまだ。「Aと書くようにしている」派と「Aとは書かないようにしている」派がどちらもいたりする。それぞれの考え方も、その違いも、大変勉強になる。読者の日常診療に役立つことは間違いない。

本増刊号で興味深いところは、著者らの書き方・考え方の多様性だけではない。読み進めていくと、いくつかの共通する理念の存在にも気付くはずである。それは例えば「言葉の厳密さよりも、相手に伝わることをより重視する姿勢」であり、「前線で戦う依頼医への敬意」や「レポートの向こうに確かにいる患者への責任」であり、「画像診断医は学び続けるべき者であるという誇り」である。そこには画像診断の本質が垣間みえていて私は思う。

『各分野のエキスパートの先生方が普段どんなレポートを書いているのか知りたい』

私が専攻医1年目のころからずっと抱えてきたこの希望を叶える機会をいただいた、伊藤様をはじめとするメジカルビュー社の方々、ご多忙のなか、秘伝の知識を公開して下さった著者の先生方、そして私の思いに共鳴し、共編者として企画と一緒に進めて下さった竹田太郎先生に、心より感謝する。本増刊号が画像診断に携わる日本中の医師を支える柱の1つとなり、それがよりよい医療につながっていくことに期待する。

黒川 遼